

〔第十九回〕

『大名評判記』にみえる房総大名について

—生実藩・森川氏を中心に—

小関 悠一郎

(千葉大学教育学部)

「文道を学び、武法を好み、行跡は悠々として礼儀正しく、怒らずおごらず、臣下の諫言を許容して、忠孝を旨とし、民を憐れむ、誉れある将である。多方面にわたる善行が知られる善将である」。生実藩三代藩主森川重信に対する、『土芥寇讎記』（どかいこうしゅうき）の評である。本報告では、この『土芥寇讎記』をはじめとする一連の『大名評判記』における房総大名についての記述に着

目し、生実藩森川氏を中心として検討した。

この『土芥寇讎記』は、元禄三年（一六九〇）段階の全国二四三名の大名について、それぞれの家系・家族、略歴、居所、領内の様子、支配の状況、主な家臣、及び大名の人柄・行跡・評判などを列挙し、論評を加えた書物である。各大名の領内支配の様子が詳細に描き出されていることから注目され、一九七六年に金井圓によつて翻刻された。しかし、成立事情については十分な検討がなされておらず、ほとんどの場合、金井説に依拠して「幕府の隠密が作成したもの」として扱われてきた。

ところが、この『土芥寇讎記』編者も参考にしたであろう書物が、複数存在していることが最近になって判明した。いわゆる『大名評判記』がそれで、『土芥寇讎記』もそのひとつだったのである。『大名評判記』は、万治二年（一六五九）頃成立の『武家諫忍記』にはじまり、寛延四年（一七五二）改訂の『武家諫懲記後正』まで、五回以上にわたり改題・改定され、大名などに書写されて読まれた本である。作者は不明だが、『武家諫忍記』の場合、序文によれば、意外にも牢人（浪人）が作者とされる。この点、堀田上野介紀正信の項などに「誉ノ将トシテ、諸浪人此家ヲソム」といった記述があることは興味深い。それぞれの成立事情についてさらなる検討が必要ではあるものの、以上のような『大名評判記』は、残された史料の少ない房総の諸大名や藩の研究の手掛かりになるのではないか。

『大名評判記』に記載された内容は主に、各大名について①名称・官位・家紋・年齢・内室・嫡子、②系譜、③所領・家老、④大名

の行状、⑤論評である。ここで、生実藩森川氏の記述を中心に記載内容やその変遷について、順を追ってみたい。

まず①について、三代藩主森川重信は『武家諫忍記』の時点で登場している。その後の別の評判記では、一部の年齢記載に齟齬が生じている。

②系譜は、『武家諫忍記』には記載がなく(③や④が記載の中心)、延宝三年(一六七五)成立の『武家勸懲記』で初めて記載が現れる。享保十一年(一七二六)成立の『武家諫忍記後正』では系譜が記載の中心になる。森川氏の家伝について、当初は詳細不明との記載が多いが、元禄十四年(一七〇一)の『諫忍記後正』では「先祖代々江州ノ人ニテ佐々木ノ嫡流、佐々木吉岐守泰継ノ四男堀部宗綱ヨリ十代堀場与四郎氏兼ノ子氏俊、堀場ヲ改テ森川ト号ス」と表記される。系譜についても四代重興(俊胤)から記載量が増える。このことは、元禄六年に重興が「御けいす(系図)」を披見していたり、同時期に生実藩の歴代藩主の遺品が整理されて、系譜の編纂が行われたことと何らかの関係を有するのではないだろうか。

③所領は、『武家諫忍記』では各写本によって記載内容に違いがあり、『諫忍記後正』になると記載そのものがなくなる。家老に関しては、「大名評判記」の成立年代によって異なる人名が記載されるが、大名や旗本の名鑑である『武鑑』に記載される情報とおおむね一致することが注目される。これにより家老の記載がある程度正確だとすれば、生実藩の家老は元禄から享保期まで三名体制がとられており、また、特定の家臣が家老・留守居などの

上級役職を固定的に担うという秩序が、元禄期から享保期まで一定程度安定的に継続していることが判明する。

⑤論評については、元々一万石クラスの大名には記載がなく、『諫忍記後正』から記述されるようになっていたので省略し、最後に④大名の行跡について検討する。三代藩主重信の行跡について見ると、『武家諫忍記』では写本により若干の異同があるものの、『武家勸懲記』からはすべて肯定的な評価となり、「誉之将」と呼ばれ、代々継承されていく。森川家の「文」については、和歌への関心の高さや茶の湯を通じた幕閣・譜代大名らとの交流、「武」については森川家文書から軍書への関心が指摘できるから、この評価は全く的外れとは言えなさそうである。

だが果たして、「大名評判記」の作者が、二〇〇人以上の大名の個々の人柄や行状を把握することは可能だったのだろうか。この点で手がかりとなるのは、『武家諫忍記』序文で「誉ノ将」と呼ばれた一〇名の大名の少なくとも半数が、徳川幕府の儒者林羅山らと相当程度親密な交友関係があったことである。森川氏が和歌や茶の湯を通じて大名や文人らと交流を持っていたことを踏まえれば、そうした交流が森川氏の人柄を知る回路になった可能性もある。

市域に大名森川氏・生実藩が存在したことは、地域社会や文化の形成・変容にどのような意味を持ったのだろうか。大名評判記の検討から浮かび上がった課題―森川氏の文事、家臣団の編成や元禄期の系譜編纂・文書整理など―の丹念な追跡が必要である。